2015.3.1 発行　第 46 号
小樽潮陵高校　3 学年

109期の風(3学年便り)

109期生の諸君、理想の旗をかかげて行かん！

109 期生一人ひとりに尋ねる。「潮陵高校での3年間は充実したものだったかい？」
潮陵高校が開校して 110 周年目に入学してきたのが 109 期生で、私は潮陵の伝統を常に意識しながら 109 期生への教育活動を進めてきた。だから 109 期生が潮陵高校の伝統に新しい風を吹き込んで欲しいという願いを込めて、学年通信のタイトルを「 109 期の風」とした。それから3年間はあっというまに過ぎ、109 期生は潮陵高校を駆け抜けた。気づいたら、もう卒業だ。
109 期生の卒業を前に、最後に君たちに問う。「潮陵高校での3年間は充実したものだったかい？」「自分の3年間を自分に誇れるかい？」
今、同じことを自分に問う。「 109 期生と過ごした3年間は、自分で誇れる3年間だったかい？」
自分で出した答えは、「過ぎたことをいくら考えても、わからない」、だ。もっとはっきり言うと「過ぎたことを考えるより、次ぎに向かって考えたい」、だ。3年間、109 期生のために真摯に自分に課題を課してきたという自負はある。でも、それが何のためになったのかという、懐疑がある。今、 109 期生の旅立ちを前に自分に言えることは、「次のステージで、また、全力で挑戦したい」という気持ちだ。
２月２８日の新聞で、大リーガーのイチロー選手に関する記事が目にとまった。イチロー選手は大リーグ史上 29 人目の通算 3,000 本安打まであと 156 本の大選手。彼は言う。「数字は大切なもの。でもその目標があるという理由だけで、プレーを続けているわけではない」。そしてヤンキースを去りマーリンズに移籍する心境をこう語った。「新しい環境に飛び込むことは若いうちしかできない。こういうことに向かっていかないと、人生の哲学は生まれてこないと思う」。私は、ここに青春を見る。 41 才の年齢とは関係なく、新しい山に登ろうと挑戦するイチロー選手の姿に、若さを見る。人は何かに挑戦している限り、成長できると信じる。
109 期生の卒業後の進路は、それぞれだ。卒業とともに、偏差値（数字）というものと縁が切れる。数字から切り離されると、自分をはかる基準をいったん喪失する。 109 期生に望むのは、新しい環境で、新しい目標を見つけ、挑戦して欲しいということだ。
卒業を前に、君たちに送る門出の言葉は、「潮陵高校の良き伝統の中で培った 3 年間が、君たちを力強く後押ししてくれる」、だ。さあ、自立のときだ。109 期生の諸君、それぞれの胸に、それぞれの理想の旗をかかげて進め！

保護者の皆様へ

保護者の皆様、このたびはお子様のご卒業、本当におめでとうございます。潮陵高校に入学されてからの 3 年間に、それぞれのご家庭にたくさんの出来事があったことかと推察いたします。本学年団が十分に対応できなかったこともあったかと思います。それでも本学年団の教育活動にご支援を賜り続けたことに、衷心より感謝申し上げる次第です。いま、109 期生は、すがすがしい表情で潮陵高校を後にします。
でも、その清々しさの裏には、3 年間の努力が潜んでいます。109 期学年団は、従来以上の厳しい姿勢で学力向上に臨んで参りました。時には課される試練の多さに憂鬱な気持ちになったこともあったと思います。特に 3 年夏休みを過ぎてからは、進学という壁の前に不安な日々を過ごしたはずです。子どもたちの揺れる様子を間近で見続けた保護者の皆様のご苦労は、いかばかりであったでしょうか。109 期生が潮陵高校で笑顔で生活することができた裏には、ご家庭の愛情があったからだと感謝しています。子どもたちが悩み成長するなか一緒に併走され続けたことは、どれだけ大変なことであったでしょうか。でも、ともに併走したことでご家庭の絆が強まり、保護者の皆様の人生がより豊かなものとなったと、私は確信しています。ご卒業なされても、私たち学年団と 109 期生、そして 109 期生の保護者の皆様はつながっています。ともに 109 期生と併走したという絆をもとに、今後ともよろしくお願いいたします。

感謝の言葉

この場をかりて、お礼の言葉を申し上げます。まず 1 年次にG組担任であった田熊先生。潮陵高校に戻ってくるたびに、G組生徒の近況をおたずねになっておられました。つぎに 2 年次に臨時担任として半年間D組を見ていただいた中野茂樹先生。瀬川先生がご病気になられ生徒が落ち込むなか、ひときわ明るいキャラクターで生徒に接していただいたことで、たくさんの生徒が救われました。最後に瀬川先生。ご病気にもかかわらず 109 期生と併走していただきました。闘病生活に入る直前に先生から託されたD組生徒の「進路ノート」と面談チェック表。「進路ノート」見ると、赤字で生徒へのコメントが書き込んでありました。氏名箋に記された面談チェックには、赤字で生徒の進路相談に関するメモが記されていました。この時期は 3 年次の科目選択の最終段階で、瀬川先生はご自分の病気に不安を抱えながらも、生徒の将来のために全力を尽くされていました。その真摯な姿は、109 期生の人生と共に生き続けることでしょう。